松高同窓会報

松高同窓会
題　字　瀬川泰次郎
編集代表者　新井　慎治
東松山市松山町1-6-10　〒355
TEL (0493) 22−0075 24−2634

ご協力を感謝して

同窓会長　瀬川泰次郎

今年は甲子の年であり、これは、六〇年に一回訪れる記念すべき年であります。

母校松高は、奇しくも期を一にして、大正十二年創立以来、六〇年を経過し、新しい出発点を迎えたのであります。現校長、細田宏一先生を中心に、大きな成果を挙げ、常に前進しつゝありますことは、誠に喜びに堪えないところであります。

毎年、四五〇名余の人材を世に送り出し、全同窓生数は既に一万三千余りに達しております。そして、政界、官界、学界、財界、芸術界等、あらゆる分野に、又郷土に、中央に、更に世界に飛躍しておりますことは、われらの誇りとするところ慶賀の至りと存じます。

又われらを育まれた恩師は、初代校長、若月秀吉先生を筆頭に、現、旧、併せて約四〇〇名を数えるに至りました。夫々の時代を画して、教育の無限の理想を追求して、全力を傾注し、人材育成のため努力されたのであります。四代目校長、山本洋一先生は、昨年、米寿を迎え、今尚矍鑠として母校とわれら同窓生を温かく見守っておられます。深く敬意と感謝の意を表する次第です。諸先生が、山本先生に続いて益々御健勝であられますよう衷心より祈念してやみません。

さて、先に、待望の同窓会名簿は、作成委員のユニークな編集により、すばらしい好評を博することが出来ました。次いで懸案の会費徴集の件も、会員多数の御理解により、順調に進むことが出来ました。会員各位の御熱意に、深く感謝の意を表してやみません。更に又、同窓生相互の親睦を図り、母校の発展に資すべき会報発行の件が総会において決議されました。

幸いにも、編集委員の快諾を得て、その情熱と御尽力により、多くの会員各位より貴重な玉稿をいたゞき、記念すべき甲子の年に、創刊号発行の運びになりました。誠に御同慶の至りと存ずる次第です。「会員を結び合わせる会報」「楽しくためになる会報」をモットーに、今後継続的に発刊出来ますよう、会員一同の絶大な御協力を切に懇願してやまない次第であります。

昭和五十九年一月

発刊おめでとうございます

PTA会長　根岸　洋

同窓会報の発刊おめでとうございます。会員相互の親睦と交流の役割を果される会報となる事をご期待申し上げます。PTAの現況をお知らせして私の挨拶といたします。本校は県下でもトップクラスの進学校として比企入間はもとより各地から優秀な生徒が入学して居りますが、十六の地区よるクラス対抗の駅伝は県下でも類を見ない松高ならではのスケールの大きな学校行事となって居り、PTAに於いても全面的に協力し各地区PTAが中継所の役割を分担し生徒・学校、父母三者一体となってこの大会を更に意義あるものとしております。又、本校には他にない記念館として同窓会館があり、生徒には「温故知新」の諺の如く建学の精神にじかにふれられる環境の中にあります。生徒達は近い将来は同窓会の一員として先輩の皆さんと共に松高に学んだ事を誇りに社会に巣立っていく様に期待して居ります。同窓会の皆様にも暖かいご支援をお願い申し上げますと共に同窓会と会報のご発展を御祈り申し上げます。

PTAが各地区の会合を通じて学校との連携を深め松高の長い歴史に培われた質実剛健、文武両全の輝かしい伝統の中での努力を親子ともども続けているところです。本年も第十九回大会として実施いたしました比企郡内八市町村を結ぶ全長七十五Kを十七名の走者によるクラス対抗の駅伝は県

会報の発刊によせて

後援会長　浜中紀夫

会報の発行おめでとうございます。

数ある県立高校の同窓会でも会報活動まで行っている会は数少いことと思い、関係者のご努力に敬意と感謝を申し上げます。

PTA、後援会のように子どもが学校にいる間という限られた期間ではなく、終生続く同窓会活動、この中でのご尽力には筆舌につくせぬご労苦があることと重ねて感謝申し上げます。

六十年の歴史をもち、一万人を越える会員が、日本国中、いな世界各地でご活躍されている本会で、会報を発行し、学校の近況、会員相互の理解を深めることは意義深いことでございます。

多様化する社会、やゝともすれば、その目的を見失いがちになる現代。学校の先輩後輩が、互に理解し、その関係を深め、多くの後輩に希望が生まれるよう、ご指導いただきたく存じます。特に進学、その後の就職などにも、このうるわしい関係が保たれ、その架け橋として広報が活用されたならば、その意義は、いよいよ深まるものでしょう。

今後とも、紙面をお借りして、後援会の活動をお知らせし、ご理解いたゞきながら、その活動を進めて行きたく思っています。

会の発展を祈る

学校長　細田宏一

同窓会名簿発刊の一大偉業を成就して後も、幾多の建設的意見が同窓会理事会で熱心に討議され、ここに松山高校同窓会会報第一号の発行が実現しました事は、誠に同窓会の発展、更には松山高校に対する激励、好刺戟でもありまして、慶賀すると共に感謝にたえない所であります。

創立当初の学校本館が、そのまま松高記念館として立派に残されているのは、同窓会員一同の松高に寄せる熱情と、母校の発展を期待して止まぬ真情のシンボルであります。現在正門西側に、春夏秋冬それぞれの折に素晴らしい景観を生みだす庭園を前にして陽光に映えて、厳然として創立以来の歴史を語っています。

さて現在松高は、教職員八十三名、三十クラス千三百五十余名、定時制約六十名の男子大規模校。比企地区の質朴の気風をよく保ち開校以来の質実剛健、文武両全の校是のもと、大学進学、部活動ともゝ大活躍をしています。殆ど生徒全員が進学を希望、五十%の進学実現、国公立合格三けたを目指して成果をあげています。全国的レベルの評価を受けている軟式テニス部・陸上競技部・空手道部・吹奏楽部・生物部等々全国大会の活躍は皆様よく御存知の通りであります。

PTA、後援会等全校の総力をあげて行われる比企一周七十五粁駅伝も本年で十九回となり、恒例の松高祭、水泳大会等とともに伝統的行事として定着しています。

以上松山高校の現状の一端を御紹介しました。

常日頃物心両面にわたりまして、御後援を戴いている同窓会の益々の充実発展と、瀬川会長、役員一同、又一万三千有余の会員の皆様方の御健勝をお祈りし、深く感謝の意を表わしまして御挨拶といたします。

五十八年度総会報告
会報発行を決定
引き続き名簿整備

昭和五十八年理事会・総会は六月四日（土）午後より、落ちついた日本庭園につづいの咲きみだれる松高記念館で行われた。出席者は地区理事の他、あらたに選出された各回の理事を併せて従来の倍増の約四十名。田中義一幹事の司会で進められ、瀬川泰次郎会長（旧2）の挨拶のあと、恒例の決算、予算の報告が井上毅幹事より、又監査報告が高沢一男（定4）会計監査よりあり、いづれも異議なく承認された。つゞいて議事に入り、年千円の会費納入に伴う事業計画について幹事から、

一、会報発行の件、目的は会員相互の親睦と向上、併せて引き続き名簿の整備に資する。編集は、旧中から五名、高定から十二名を編集委員とし事務局を加え、これに当る。部数は約一万部とする。等の提案があり、会計担当者から会費納入状況は約二千名で二百万円、更に若干の増収見込みで、会報発行も可能との補足説明があり、質疑応答のあと満場一致で可決された。

つゞいて、同窓会名簿整備の件で住所変更訂正依頼が事務局へ電話又は会費通信欄で約三百件に及んでいること、記念館がクラス会で数回利用されていること、名簿の注文が現在でも月一・二冊の割合であること等同窓会活動が年々活発になっていることが報告された。

議事終了後、引き続き懇親会が催され田島正英副会長（旧6）の「会報の発行が洛陽の紙価を高からしむるように」との音頭で乾杯、各理事のスピーチを交え、なごやかな歓談のひとときを過し、散会した。

追記

○会費納入の方法が一部変ります。今年度から振込みの手数料は会の負担とします。

○会員の住所変更で事務局のところで明らかになった分（約三百名）は、その回の常任理事（代表者）のところへ報告ずみです。

○地区の支部会及び各回同窓会活動費が計上されているが、現在は殆ど利用されていないので、実施の場合、遠慮なく事務局（記念館内）まで連絡して利用していただきたい。

○同窓会名簿、残部ありご希望の方、事務局まで申出下さい。定価三千五百円（郵送料込み）

会報愛称を募る

今度、おかげ様にて会報の発行を見ることが出来ましたが、皆さんに親しまれる会報に致したく、会報の愛称をつけていただくこととしました。編集委員会でも話題となり、校歌からとって「ゆかりの色の」とか、松高のシンボル・ツリーの松から「松風」「松韻」とかの案が出ましたが、広く皆さんから公募することになったわけです。右趣旨御了承の上、よき名称を奮ってお寄せ下さい。なお応募の方には会より記念の粗品を贈らしていただきます。

記

葉書き一枚に愛称一つを書き、東松山市松山町一の六の十、松高記念館内同窓会事務局まで。

同窓会の動き

活況を呈す　松韻会

○松韻会（旧制松中卒業生有志の集い）第四回総会は、昭和五十八年五月東京上野で、名誉会長山本洋一先生はじめ恩師、各回卒業生など約五十名が参加して盛大に行われた。総会は、(1)会務報告、(2)ご長寿恩師、受賞会員への祝賀、(3)時局講演、(4)懇親会、という順序で進められたが、終始和気藹々、お互いの再会と健康を喜び合うとともに懐かしい〝松中時代〟の昔に還って懐旧談に花を咲かせた。

また松韻会は、毎年二回発行する〝松韻ニュース〟を通じ、会の活動状況や恩師、会員の消息等を連絡し、好評を博している。

今後松韻会は、松中創建以来の伝統的気風を後進に継承させることを目途とし、会員相互の親睦と連帯をはかり、母校・松山高等学校同窓会活動に何分かの寄与貢献することを期して行く。

（松韻会幹長柳下良二記）

心強いスタート　同窓会・定時制

定時制の部も第三十三回の卒業生を迎えて、現在千二百余名に達し、実社会に於て夫々の分野で活躍されている仲間の多い事は誠に御同慶にたえません。部会第一回の発会式は昭和五十五年六月箭弓神社内紫雲閣に於て恩師の先生方や学校関係者、同窓生の皆様方多数の御参加を得て盛大に行われました。久方の再会の喜びは言語に尽くせず、参加者は学窓に学んだ当時の数々の思い出に感無量の花を咲かせました。あれから一年二年と月日は夢の如く流れて、この間定時制部会にあっては新役員の選出、（代表勝田栄雄）卒業生名簿の整備、在校生育成の為の諸行事、会員連絡網の確立、町の有識者との懇親会等々を経て満三年が過ぎ、四年目の春を迎えました。この間も瀬川同窓会長さん始め学校当局、同窓生、在校生各位の御協力を受け、ここまで発展できて参りました事は誠に有難く、御礼申し上げます。偏に松高の為を思う皆様のお気持ちの結晶と思います。しかし最近定時制の灯は皆様も御存知の如く県内でも一つ消え二つ消えして淋しくなってきています。

この中にあって私達松高定時制が相変わらず頑張っております事は誠に喜ばしく、偏に皆様方の力強い御協力があってこそと思います。

私達同窓生は昭和二十三年より続いた伝統あるこの松高定時制を維持又、尚一層の発展を計ってゆく為にこれからも皆で心を合わせ頑張ってゆかなければならないと思います。御関係の皆様方にはこれからもより一層の御協力をお願いする所存であります。

クラス会

山本先生の米寿を祝う　旧一クラス会

一月六日、レストラン「欅」にて開催。主賓に山本洋一先生を迎え、外に島田万吉・吉田桂厳先生と朝岡先生未亡人が出席

出席会員二一名（欠席二八名）

例年は秋になるのが五十八年一月六日が山本先生の誕生日に当り、米寿を迎えられるので、山本先生中心のお祝いのクラス会となった。気持ばかりのお祝で、却って先生には御迷惑をかけてしまったが、それでも大層喜んでいただけて良かったと思う。

欠席の諸兄からは、このための記念品代を送って下さって有難う。

幹事は原　亨、高橋美則新井槙治

（新井槙治記）

叙勲表彰を祝う　旧二クラス会

七月三日、駅坂にて開催

来賓に山本洋一、杉山文雄、吉田桂厳の三先生御出席。

出席会員、二〇名（欠席二七名）

今回は瀬川泰次郎、屋代広司両君の叙勲のお祝いを兼ねて呼びかけたが、所用や病気のため、例年より欠席が多かったのは残念、尤も朝からの雨模様のせいで、出足を鈍ぶらせたのかも知れない。幹事は小林秀吉君

追記

八三年秋　宮崎普君が勲五等の叙勲を受ける。

八四年一月　小林秀吉君が文化功労者として県知事より「文化ともしび賞」を受けている。

卒後五十周年　旧六クラス会

卒業五十周年の旧中六回は風薫る六月四日吉見百穴近くの小松園で、記念クラス会を開催、現時点の生残り五十二名中、二十九名が集った。白髪光頭、互に古稀に近い年輪は争えないが、面輪には夫々五十年前の名残がある。当時古稀の老と謂えば白頭長髯の宿老型であったが、今見る同期生は何れも精気横溢、未だ多分に娑婆気を持つ連中揃ひである。殊に来賓の吉田先生は既に傘寿を越へておられるが添黒の髪艶やかな豊頬は、壮者そのもので慶祝の感動一人であった。酒杯の間幸かった軍事教練、楽しかった六円余の積立で行った関西修学旅行、空ッ風の吹寄せる砂塵に校庭の柵が一日に尺余も埋められ翌日は校庭で矢の根を拾ったこと等が交々語られ歓の尽く処が無かったが、潮時をみて校歌斉唱、後日又、健在を確かめ合うクラス会の再開を約し名残りを惜しみつつ散会した。（田嶋正英記）

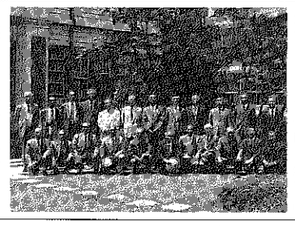
松高記念館に集合　旧八クラス会

旧中八回生のクラス会は、新緑薫る五月十五日に、百穴前の松音屋で開かれた。恩師の山本、大原、吉田の三先生を囲んで会員の出席者は二十三名であった。

当日は東松山駅西口に集合し、バスで松高へいき、懐しい昔の姿の記念館前で撮影、それから約一時間記念館の見学をして五十年前の想い出にふけった。

懇談会の前に百穴をバックに記念撮影をし、恩師の三先生から五十年前を想い出す懐しい調子でお話が約一時間程あり、続いて出席者の自己紹介、懇談となった。酒やビール、カラオケよりも昔の想い出、卒業後のことなど、話に花が咲いて、あっと云う間に三時間は過ぎてしまった。母校を卒業して五十年振りで始めてのクラス会故話はつきないが、後日の再会を期して、名残りを惜しみながら散会した。

（本郷一司記）



戦中・戦後を語り合う　旧十一クラス会

旧制中学を卒業して以来、四十五年の年月は流れ、我々同級生も停年を早くも過ぎ去り、一人二人とかけてゆきますので、数年前より年一度は顔合せの意味で同級会を開催しようと申し合せ、毎年クラス会を実施している。

監事は各地区廻り持ちと云うことにきめてあります。

我々の年代は支那事変、大東亜戦争と、青春時代を、戦争にて明暮して、この犠牲となられた方々も数多い。入学当時は百二名であったが卒業の時は約七十数名で、現在音信の有る方は約五十五名位である。同級会のある度に戦争でつらかったこと、戦後のつらかったこと、そして今日の楽しい家庭生活、子供や孫の事と話し尽きず時の過ぎるのも忘れる様である。

申し遅れましたが、我々は十一回生なので、「松士会」と云う会に致しました。とりとめのない事申上げましたが、松高の繁栄を祈念し筆を止めます。

（伊藤定和記）

恩師を囲んで　旧中二二・高一クラス会

昭和五十八年十一月、恩師富田林治先生の剣道範士になられた祝賀会という事で皆が集った。これが、一番最近の顔合せである。クラス会も四年に一度という約束で実施してきたが、今では、毎年でもよいのではないかという声もチラホラ……

昨年の五月には、初めて伊香保まで足を伸ばして一泊の同級会を行なった。大変ゆっくりとできたし、昔のままの懐かしいけんかやら、校歌を唱いあげての涙やら大成功であった。

我々の仲間の仲の良さとまとまりの良さは、おそらく松高同窓会の中でも一・二を争うものではないかと自負しているが、年を経るに従い誰も一人でもいなくなる事がない様にひたすら祈って、いつまでも頭を合せ続けたいと願っている。

（高瀬進・長谷部英男記）

われらが仲間　三―一会

昭和三十三年第十回に卒業した同級生を中心とし、ゴルフでもやろうかと、集った十二名が母体となって発足し、現在では金学級から、参加し会員も三十数名となっている。年中行事としては、年二回のゴルフと、夏冬の親睦会を行っている。しかし、年代的に多忙であったり、転勤等で遠方に行ったりしてる者があり、ゴルフへの参加は少ない。ゴルフをやらない会員もいることから、酒のある親睦会は盛大をきわめている。特に、冬の親睦会は、十二月初旬ということから、参加者も多く、遠い昔の話に花が咲いたり、暫くぶりの友と、その間の話をしたり、次の予定を決めあったりしている。

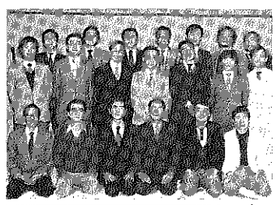
かって、我々が松高で過した、若き日と、同年代の二世が育つ中で、いつまでも、若さを失うことのない、会でありたいし、遠い友が、再び会い語らいの出来る場としておきたく思う。

（長　孝弘記）

十六年ぶりの松門会

昭和四十一年度第十九回埼玉県立松山高等学校卒三年八組の同級会松門会が一月二十九日（日）午後二時から坂戸グランドホテルを会場にして、クラス担任であった恩師の石原実先生（東松山市立新明小学校長）のご臨席のもと、十六年ぶりに開催された。懐かしい同級生が久しぶりに一堂に会したことで、在学当時の思い出話や、級友の近況話に会はもちきりとなり、盛会裡に夕刻まで楽しい時を過ごし、最後に応援歌を高唱し、次回の再会を約して散会した。

（清水作次記）



松高二十五期会発足される！

昨年十二月四日、卒業十周年を記念して、昭和四八年に卒業した同窓生有志によって、松高二五期会第一回総会が東松山文化会館大会議室において盛大に挙行された。

当日は師走という忙がしい時期にもかかわらず、先生方を始め多数の方々の参加を得、約一三〇名の会員をもってスタートすることになった。

この会は、会員の親睦を図ると共に、末永く松高を愛する心を養うことを目的とし、年一回の総会を中心に、回を重ねるごとに、ゴルフ大会などの楽しい催しを行なうことを事業としている。

会の運営については、年会費を千円としこれを運営費にあてている。

今後も末永くこの会が続く為にも、同窓生の皆さんの益々のご参加をよろしくお願い致します。連絡を乞ふ。

会長　大木幸一

事務局　坂本祐之輔

市内材木町六―八㈫〇〇二八

（坂本祐之輔記）

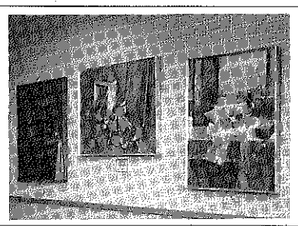
定時制クラス・地区会ニュース

定時制十四回生は三～五年毎に、十五回生は七～八年毎に、二十三回生も卒後三回程、二十五回生は昨年市内ラドンセンターで開催。二十七回生は毎夏キャンプ形式の集まりを開く等。又吉見地区では各回を超えた定時制同窓会の地区会も盛んに行われている。

以上ですが、これ以外にも活動情報がありましたらお知らせ下さい。

OB会

美術部OBのことなど



卒業してからも、三、四年の間、ちょくちょく美術室に顔を出していたおかげで本来なら知らなくとも不思議のない後輩諸氏と現在でもおつき合いいただいている。

その中で美術関係の学校に進学した者も私の知っている範囲で十人ほどおり、デザイナー、教員、大学院で研究等、それぞれがんばっている。美術関係以外でも、誰それは何をしている、などよく話を耳にする。

ここ三年ほどその人たち、私を含めて四世代ほどのOBで忘年会を行っていたが、五十八年末は従来より多人数が集まった。恩師、堀嘉雄先生の葬儀で久方ぶりに顔を合わせた。さらに若い人たちもこの時集まった。堀先生に引き合わせていただいたと言えるかもしれません。

OB一同心より堀先生の御冥福をお祈り致します。

（斎藤　靖記）

注、五十八年秋、記念館でこのメンバーで松高祭に合はせて美術部OB展を開いた。

毎年プールに集合　水泳部OB紫水会

現在の松高に水泳部が誕生したのは、昭和十二年である。言うまでもなく、この前年に県下二番目のプールが当時の中学生たちの勤労奉仕などを入れて完成した。（建設費は約八千円）今では現存する最古のプールになるとの事である。

それから十年目、戦後日本が立直るころ、昭和二十三年、丁度学制が変って高校になり、県下第一回高校水泳選手権大会が浦高プールで開かれ、そのとき松高水泳部が初優勝し、更に四連覇を遂げ、その後三回優勝の戦績をつくり、県下に松高の名を記した。現在も活躍中。

この水泳部OBは紫水会を組織（昭二十七年頃）し、一回より現在のOBまでが入会して、現役を物心両面から支援し、OB会員の例会を今も続けています。例会は毎年八月の最終日曜午後一時よりプールでレクをやり、その後新旧OBの交流会で親交を温めている。

事務局は現水泳部内。

（横田隆史記）

校歌シリーズ(1)

校歌と若月先生

(旧1) 新井 槙治

寒くていまだかつて一回の生の皆さまの前に出ることもなく、若月先生は昨秋体調を崩されて「緑王原」の定評がある。私はそのつけられた事を、私自身の時間に、若月先生は遠くの世界へ旅立たれたのである。

私は、校歌の作詞を、若月先生に依頼した。若月先生は、校歌の作詞を、若月先生に依頼した。

校歌は、校歌の作詞を、若月先生に依頼した。

校歌は、校歌の作詞を、若月先生に依頼した。

校歌

恩師の近況

今回は校長先生、在職20年以上の先生から近況を書いていただいた。
敬称略。アイウエオ順。

大沢勝三郎

最初は数学教師として、二度目は校長として、楽しく勤めた松高を最後に退職した私は、数学の廃物利用で土地家屋調査士試験に合格し、熊谷に事務所を開設、今までに補助者二人を合格させ独立させました。

今年四人目が合格の見込。

岡部一雄

発足当時の定時制分校（川島分校）の主任だったあの頃が、無性に懐しく、戦後の〝展望〟を合図してくれた原点だった気もします。六十六歳。

川越・狭山辺の同好者と万葉・源氏などの輪講に明け暮れしています。読書と散歩と、日日是好日……。

岡本良明

第二の人生について計画をたてたのは四十七才の頃でした。それは書を友とすることです。勤務の休暇を利用して、書道の免許を得ることに専念し八年後に、高校書道免許証を手にすることができました。時に五十五才、定年後も松高書道講師として古稀に至るまで勤めさせていただきました。

おかげで書の道が開け今も子どもたちに手ほどきすることができます。古人の語に「不知老之将至」の境地で筆硯の道を歩んでいます。

岡本良三

二十三年間にわたった長い松山高校の教員生活を終えてからもう一〇年たちました。県立歴史資料館・県立博物館と転々として、現在教育局の文化財保護課に勤務しております。文化財一すじといえば格好いいんですが、所詮行政内のこと、研究もままならず、開発と文化財保護のはざまで非力をかこっています。

小谷野藤男

松高で退職した後千葉県の短大に勤め、十年たった時交通事故で右脚を骨折したのでやめました。同僚に卒業生の福島肇さんや元教員の市木先生もおられ、折に触れて松高の思い出を語り合いました。目下家の付近で歩行練習中です。

小文字善一

旧中義一先生のお勤めで、滑川村の方言を集め、役場の係員の加筆により、「昨年村から「滑川村のことば」を刊行して頂いた。孫に読ますべく同頭録を書き始めたが、健康勝れず、遅遅として進まない。一昨年末妻に先立たれ、やもめ暮しだが蛆は湧かない。

渋谷五郎

四十五年間の勤務を無事終りはや二年、皆様のお蔭で益々元気で公務中出来なかった趣味等を通じて忙がしく楽しい日を送っております。これから暇を見て松高時代テニスの試合で全国を歩いた想い出の地に旅をしたいと思っております。

楫田茂

地域社会の要望に応えるべく、教育の原点に立って高校教育を推進し、つねにリーダーシップをとるように心掛けています。進路や生活指導、部活動の充実と躍進に力を注いでいます。

元気に生活しています。

手塚広次

旧松中、聖学院高校、早稲田予備校とチョークにまみれた五十年、現在八十四才、近頃はよく長寿の秘訣は？ときかれます。答は「ここころもからだもたべものも平凡であること」随筆短編だけを狙っての読書、月に二十分の散歩、時には荒川の土子まで。

富田林治

竹力を握って六十年、去日剣道界最高の範士号授与され、教え子、吉見町、郡県内の名士、剣士に祝賀会・大会を催して戴き、身に余る光栄と共に自己を厳に律し、県剣連副会長、吉見町武道館長として青少年と共に精進する昨今である。

長谷部副二

今年は七十才になる。杜甫は「人生七十古来稀なり」と詠んでいるが、まだまだ元気でいます。孔子は「七十にして矩を踰えず」といっているが、その心境には遠く及ばない。つとめてテレビの教養番組を見ることにしている。

細井洋

「風癒々として校庭寒し。旧師一度去ってまた帰らず。」

昭和四十五年松高を去る時の私の惜別の詩である。私は在任中「頑張リズム」を生徒諸君に植え続けて来た。今も尚予備校で、吹き込んでいる数学の自由人である。数学道をひたすらに歩く大正五才の万年青年の意氣盛。

松崎宗吉

現在、妻と末娘と二人でひっそり暮らしています。群ゼミ太田に顧問兼講師として週二日、県の老人大学に隔週一日通う外は、六十の手習いの日本画と古文書の勉強が歯車の中心で、老人病と小人閑居から遠ざかっています。

山本茂

只今、川女の窓ぎは旗。でも若い美しい司書さんと明るい図書館生活の毎日。川女にきて、父娘二代の出会いは最大の悦びです。

物資は極端に不自由ながら、平和の灯がつき、のびのびとした赴任当時の松高生活が懐しく甦ってきます。定年を目の前にし、恍惚の人にならぬよう生きるのが今の課題です。

矢代登

昭和四十六年～四十八年の間校長でお世話になりました。以後浦和高校長で四年間をすごし退職。更に嵐山の県立歴史資料館長を三年。現在は郷里にて村史の編纂・古文書の勉強会・講演など。晴耕雨読で極めて健康。六十八才になりました。

吉田博太郎

松高を出てから早や十七年もたっている。理科教員として十四年お世話になった思い出は尽きない。

秩父高、教育局、朝霞高を経て、目下坂戸高にきている。還暦の味をかみしめているが最後まで頑張るつもり。松高の限りない御発展を祈念します。

玄川正義

お陰様をもちまして、益々健康、日々愉快に働かせて頂いています。このたびはからずも、文部大臣賞を頂戴いたし、愚妻ともども天皇陛下に拝謁を許され、思い残すことなしの心境です。松高を目指して努力すれば、日本の教育問題は解決。皆様のご健勝お祈りします。

吉田雄嚴

八十二才ですが老人会長として老人の相談相手となり又趣味として川柳・囲碁・菊作り等をやっていますが趣味は友を呼び友は更に友を呼んで広く世間の人と交はり楽しい日々を送っています。継続は力を薬み心の支へである事を身を以て痛感いたしております。

吉野博太郎

松高を出てから早や十七年もたっている。理科教員として十四年お世話になった思い出は尽きない。

秩父高、教育局、朝霞高を経て、目下坂戸高にきている。還暦の味をかみしめているが最後まで頑張るつもり。松高の限りない御発展を祈念します。

山本洋一先生を訪ねて

旧一回　新井槙治

十二月の初めにお会いしました。八十九才には見えない元気さに驚きました。足の運びが少々頼りなくなって来たと云われたが、お祝いに贈られた数本の杖もまだ押入れの中でご用待ちの次第。ご子息は戦病死、又奥様にも先立たれ、これまでの常盤町の自宅をはなれて、今は同じ浦和市内の仲町に住む女婿の村岡さんの御家族と一緒にくらして居られます。

悠々自適の毎日で、時たまデパート廻りもなさいますが、天気が良ければ散歩が日課で、お伴もはいつも万歩計と愛好のカメラです。先生が撮った映像の中から傑作が出ました。今春の県の美術展に入選しました。私はその出品作を見ていないので、複写をお願いしました。雪の朝明けの中の木立ちと、湖水に映るその影、構図の美しさとソフトな感じは流石に素人離れしたものです。題名は「雪の朝」カラー写真で載せられないのが残念ですが、その出来栄えを皆さんもご覧下さい。

山本先生の作品「雪の朝」

同窓会役員の構成

現在の同窓会の役員体制は地区毎、各回毎にそれぞれ理事・常任理事をお願いしお骨折りをいただいている。（詳細は同窓会々則を参照）

特に各回毎の役員は同窓会名簿作成（昭和五十六年）を期に新たにお願いし、現在に至っている。

編集委員は勿論、会報発行を目標に昭和五十八年六月に委しよくし、第一回編集会議を同年の十月二十九日にもち今回に至っており、会報発行に当っては同窓会あげての全面的体制を布き、旧中から五回毎に一名、高校からは三回毎に一名、定時制は全回から若干名で総計十七名である。

会長　瀬川泰次郎（旧2）
副会長　田島　正英（旧6）
〃　伊田勘三郎（旧16）
〃　長谷部英男（高1）
〃　勝田　栄雄（定1）
会計監事　高沢　一男（定4）
幹事　田中義一　井上　毅　八木原宗夫、長谷川清司　寺田　一三、遠藤　知也
事務担当　永見　絢子

松高同窓会 常任理事（各回）

旧一	新井　槙治
二	小林　秀吉
三	杉浦紀二郎
四	杉田　一夫
五	新井　定吉
六	中島　正吾
七	岡野勝一郎
八	本郷　一司
九	清水　茂三
十	太田知次郎
十一	伊藤　定和
十二	鯨井　孝一
十三	柏俣　昌平
十四	竹谷　正
十五	関口　晃
十六	大塚　賢一
十七	中島三之亟
十八	山田　佳明
十九	小林　辰男
二十	須藤　実
二十一	岡部　俊夫
二十二	高瀬　進
二十三	竹内　莞二
高一	長谷部英男
二	円山　智玄
三	田島源太郎
四	横田　隆史
五	宮崎　得一
六	鯨井　彰
七	小林　常行
八	岡山　義雄
九	瀬戸　実
十	江野　貞夫
十一	吉野　茂生
十二	今井　章夫
十三	竹間　暎
十四	下境　捷正
十五	原　久夫
十六	小川　藤雄
十七	小林　稔
十八	金子　克己
十九	渡辺　清
二十	友田　善治
二十一	江野　幸一
二十二	田中　忠久
二十三	岡部　一真
二十四	松崎　則之
二十五	大木　幸一
定一	勝山　栄雄
一	小高　恒三
二	黒田　益造
二	松本　喜作
三	大塚　益司
四	藤野　好夫
五	上野　国雄
七	中村　昭一
八	井上　彰次
九	伊藤　三夫
十一	山口　英輔
十三	国島健三郎
十五	須藤　勝
十九	金子　建二
二十一	間山登喜雄
二十七	岸沢　正治
三十	井戸　達志
	北村　英彦

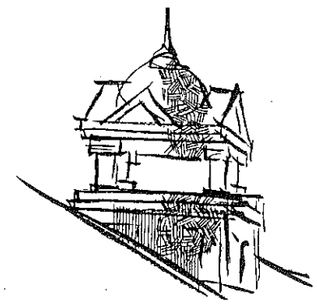
松高同窓会 常任理事（地区）

東松山地区　新井槙治、新井定吉、中島三之亟、浜中紀夫、竹内莞二、国分善三
小川地区　宮沢正治、松本純一、金子万蔵、円山智玄、関根雪雄
東京地区　森武治、峯岸晃一
吉見地区　高沢一男、金井武夫、堀口昭義、田端章治、馬場昭男
川島地区　小島和義
嵐山地区　福島秀雄、設楽秀夫
玉川地区　柏俣昌平、根岸渡
坂戸地区　清水茂三
川越地区　水村三郎
熊谷地区　新井守雄、斎藤正義
浦和地区　杉田保三、小沢進、神部基
寄居地区　日下部明夫
備考　昭和57年11月理事会

編集委員一覧

卒業年度	氏名	担当の回	TEL
旧1	新井　槙治	旧1～旧5回	0493－22－2115
〃8	本郷　一司	〃6～〃10	0493－22－3865
〃12	鯨井　孝一	〃11～〃15	0493－34－4350
〃17	堀口　昭義	〃16～〃21	0493－54－1268
〃23	竹内　莞二	〃22～〃23高1～高3	0493－22－0477
高4	横田　隆史	高4～高6	0493－22－2142
〃9	瀬戸　実	〃7～〃9	0493－22－1897
〃10	江野　貞夫	〃10～〃12	0493－23－1663
〃13	竹間　暎	〃13～〃15	0493－24－1082
〃17	小林　稔	〃16～〃18	0493－65－1079
〃19	渡辺　清	〃19～〃21	0493－22－1520
〃23	岡部　一真	〃22～〃25	0492－97－2059
定1	勝田　栄雄	定時制	0493－23－3600
〃2	松本　喜作	〃	0493－22－1522
〃2	黒田　益造	〃	0493－23－2717
〃13	須藤　勝	〃	0493－23－3454
〃21	岸沢　正治	〃	0493－24－0711

母校だより



情熱を傾ける部活動の指導

陸上競技部顧問　原島貞弘

にくい程の事をやってのけ、又そのレベルが高ければ高い程最初に働いた動機は強烈であったにちがいない。人生や社会に経験の浅い高校生は行動を起こす時にとまどいや不安を持っている。潜在能力やエネルギーを秘めている若者に信念を持って正しい指導をしてやれば目をみはる様な活躍をし出すものである。貧しい生活からぬけ出す為にみづから血のにじむ努力をしてプロボクサーのチャンピオンになる様なハングリーさは松高のみならず今は極めて少ない。ならば指導者も又何かの動機を持ち自覚を持たねば世間に注目される松高にはならない。低いレベルの流行を追い、目先の楽しみで一日を過す様な生徒が多い学校ではヒーローも生まれない。努力をしている者を認め、努力を讃え、努力した人を知る様な事は昔も今も変らない指導のポイントであろう。最初の努力が好結果を生み、次の目標が見えて来るものである。「チャンピオンとなる者は自分の未来を予測するものらしい」。だから輝やける自分の未来に向って努力を惜しまない。指導者としてふがいない自分に云い聞かせるつもりで書くならば「お前はこれで満足か……」である。

話を元にもどして、若者が高いレベルの人生への動機づけを部活動の中から少しでも見つけてくれる事を願っている。生徒も指導者も努力をしよう、松高はやがてチャンピオンとなるべき学校なのだから……。

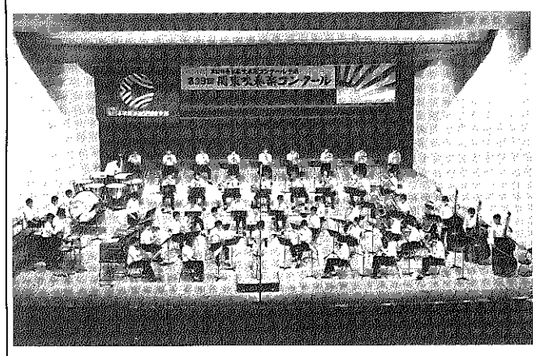
鹿児島インターハイの杉本選手

美しい響き

吹奏楽部顧問　八木原宗夫

松高吹奏楽部が応援団の一部として誕生してから、まもなく25周年を迎えます。私も当時、吹奏楽部員として楽器を手に毎日練習に励んでおりました。昭和40年6月、当時の体育館のステージで吹奏楽部創立時よりの念願であった第一回定期演奏会が開催されました。この定演も今年度で19回目になります。また、54年12月よりクリスマスコンサートが加わり、これも去る12月25日、東松山文化会館に於て第五回目として盛大に催されました。六月の定演と「冬の定演」と呼ばれるクリスマス・コンサートは校内はもとより、地元の皆様をはじめ、県内の吹奏楽愛好者の熱烈な支持を得るに至りました。

今年度の吹奏楽コンクールは8月に西大会が開かれ、高校一部で4年連続「金賞」を受賞し、続く県代表選考会で「最優秀賞」をいただき、9月24日新潟県で開かれた関東吹奏楽コンクールの出場権を獲得しました。北陸越後の街に力強い松高サウンドが高らかに響き渡ったのです。表彰式では「銀賞」を受賞することができ、この演奏が最後となる三年生達の顔には、三年間のつらく、苦しい中にも充実した高校生活の数々の想い出が次々と脳裏をかすめている様でした。埼玉国体時の楽器の老朽化に伴う修正、補充の問題等、常に頭を悩まされる中で生徒の毎日の地道な努力の結晶が定期演奏会や吹奏楽コンクールに美しい響きとなって、力強くこだまするのだと思います。



第39回関東吹奏楽コンクール　於　新潟県民会館大ホール

生物部両神山で採集活動

生物部の活動

生物部顧問　肥後朋子

松高生物部は、哺乳類、山椒魚、古生物、野鳥の四班に分かれて独自に活動し、その成果を日本学生科学賞に昭和四十五年以来ほゞ毎年出展し、好成績をあげている。

最近五年間を顧みると、哺乳類班はハタネズミの実験動物化をめざした研究で、昭和五十四年度全国二等賞、五十六年度三等賞に入選。

山椒魚班は今年度、笠山におけるハコネサンショウウオの幼生の調査をまとめて出展し、県では最優秀賞、県議会議長賞、全国3等賞に入選することができた。

古生物班も、昭和五十六年度県最優秀賞を得、全国展に出展している。

生物の研究は半年、一年では仲々結果が出ない。大学進学へ向けて実質的な活動期間が一年余しかない松高生物部が成果をあげられるのは、やはり先輩の努力の結果が後輩へ引き継がれ蓄積されているからである。そこに松高五十余年の伝統の息づいているのを感じる。

心のひねり技

——母校を訪ねて——

岡本奎六

「松高生に話をせよ」とのご依頼で訪れたのは、三〇年振り。スタンフォード大学の八百万坪（全世田谷区の広さ）には及ぶべくもないが、校地は拡がり、校舎も立派に。思い出の詰った記念館も、一見に値する。が何より、聴講の松高生千余名は昔の十数倍で、県下指折りの受験校に変身とか。

いまの日本は、青年も一部成人層も、飛躍・発展の滞ったモラトリアム期にある、といわれる。わが松高生の熱心で規律正しい聴講態度には、そのような片鱗も伺えない。たゞ、時に居眠りコックリが散見されたのは、夏の風物詩でもあり、講師の未熟さでもあると反省されられた。

話の導入は、若者時代に損のようで得をしたこと三つ。

一、専らの小説読みが、読み考える力をつけた。

二、百性仕事や軍隊生活が、心身の耐える力をつけた。

三、ひとに喰いつくあつかましさが、出会いによる感化をもたらした。

損得に鋭敏な現代若者気質を考えての出だしであったが、いわんとすることは、発想の転換（ウム・ツェントリールンク）といわれる心のひねり技の面白さ、大切さを訴えたかったまでのこと。

若者時代に聴講した菊地寛の

「吉田松陰が偉いのではない。まわりの人が持ち上げただけなのだ。……」

という、人を喰ったようなひねり技が、いまも心の底に焼きついて離れない。

若者時代は、わたしに限らず、一生涯を支配する強いインパクトを受入れ易い時期だ。心理学者のはしくれとして、そう感じているがどうであろうか。そういう若者時代観は、H・ヘッセのいくつかの自伝小説のテーマともいえよう。

アルバム作り三十年

旧十六回　国分喜彦

校門をくゞると、いつも懐かしい若い頃の思い出が、私の血を躍らせます。諸先輩の築かれた、松高の良き伝統が、今も私の心の支えとなっています。

幸にして、私は写真技術を通して地域社会に、いさゝかなりとも貢献してまいりました、他の同窓生と異って、三十数年間も、母校の卒業アルバムを作る事に参画出来その変り行く姿を、カメラを通して、見つめられたことは本当に幸だったと思います。なかでも桜花爛漫の校庭、秩父連山を背景にした、夕暮れ時の記念館などの美しい光景は、今もなお強い印象となっています。

昔ながらの伝統を引きつぐ現代の松高生の節度ある姿を見るにつけ、松高の中には気高い精神が、脈々と生き続けている事に気が付きます。いつまでも、いつまでも、この松高魂を守り続け、巣立ち行く卒業生の皆様が、社会の大きな擔い手として御活躍されることを願ってやみません。

定時制近況

充実した一年

松高定時制にとって、五十八年度は対外的に大きく飛躍した一年だった。五月の全国定通体育大会埼玉県予選会では、各クラブとも大健闘した。剣道と卓球の男子個人が全国大会の補欠となったほか陸上部でも入賞者を出した。また野球部はシード校として全国大会出場が期待されたが惜敗した。九月の西部地区大会では、野球部が優勝、羽球部女子は、団体、個人戦とも優勝した。さらに剣道と卓球の男子個人戦準優勝など見事な成績をあげた。続く十月の県大会でも羽球の女子団体と野球が準優勝し剣道女子個人は見事優勝を飾った。

一方、文化関係においては、松高定時制独自の文化祭『松定祭』が十一月六日に行われた。生徒各自の仕事についての、去年に続いての作品展示は来校した諸先輩の大きな賛辞をうけた。また、午前のバザーや午後のステージ発表も各学年ごとに趣向を凝らし盛り上がりを見せた。さらに、十一月二十日に本校を会場として第十三回定通教育を良くする会西北ブロック本大会が行われた。大会史上未曽有の大盛会となり、午前中のレクレーションに続いて午後からは八つの分科会に分かれて、学校生活、仕事、クラブ活動等のテーマについて熱っぽく討議し合った。このように今年度は対外的にもまた校内行事においても大変充実した一年であった事を御報告します。

私も卒業生の一人として、更に技術を磨き、母校の発展して行く姿を撮り続け度いと、念願しております。

ハンガリーにて思う

松高教諭　野口長熠

私は、昨年九月三十日から十六日間、文部省の教員海外派遣団の一員としてヨーロッパ（オランダ、ハンガリー、フランス・スイス）の教育事情を視察する機会を与えられた。小中高大学の訪問の中で最も印象深かったのはハンガリーのフェルデス・フェレンツ・ギムナジウムであった。——ハンガリーでは八年の初等教育、四年のギムナジウム（日本の高校に相当）を経て大学へ進学する——このギムナジウムはハンガリー第二の都市、ミシュコルツにあり、四学年で二十四クラス、生徒九百名（うち女子三百名）、教員五十六名、創立以来四百二十五年の歴史を誇り、多くの指導者を世に送り出している。

私達の訪問に対し、両国国旗を掲げ、ダリヤと菊を飾り、六十人のすばらしい混声合唱で迎えてくれた。校長をはじめ各先生方は自信にあふれ、生徒は生き生きとしていた。私はこの学校に松高との共通点を感じるところが多かった。

この学校の象徴は〝博物館〟であった。創立当時の古い建物の一部が〝博物館〟として保存され、様々な資料が展示されている。新入生は入学当初ここで学校の歴史を学び自覚を促される。二百五十年前の鐘があった。これは初め町の時を知らせる鐘だったが学校の鐘として使われるようになった。現在は一年に一回、卒業式の日に鳴らされるという。そして卒業生の写真が年度毎に飾られている。まさに〝博物館〟は学校の歴史を物語り、在校生、同窓生を結びつける絆となっている。

〝博物館〟を見学しながら私は松高の〝記念館〟に思いを馳せていた。

記念館に学ぶ

在校生の感想から

○校長先生がよく口にする「伝統」が形となって残っているのだと思う。（M）

○九十才の青渕の書や校章の由来など一目でわかる。旧松中の校章も、ちゃんと現在の松高生の襟章についている。（O）

○「旧校舎を現在まで保存しているのは県下で我校ぐらいだ」ということを聞いて、大変誇らしいことだと思った。（S）

○第一印象はあの庭からみた建物がすごく趣のあることでした。内に入っては教科書の陳列がおもしろかった。（A）

○古い順に並べてあり、とてもわかりやすい。（U）

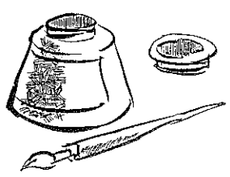
○展示物はもっとふやしてほしい。（H）

○生徒会誌や古文書が閲覧できるとなおよいと思う。松高の歴史を年表にするとよい。（H・K）

○これからも何十年、何百年と記念館を残してもらいたい。（T）

お願い　会員所有の資料何でもけっこうです。記念館へよろしく。

随想文芸



青春のある風景

旧六回　松崎宗吉

旧臘久しぶりに松高を訪れた。建物は皆近代化しているが、旧校舎の中心部は松高記念館として残され、同窓会の尽力で整備された和風庭園の奥に、とんがり帽子を載せて聳えている。

館内には、写真・書画等六十年の歴史を語る資料が展示され、豊月堂の陣屋の大福餅の皿なども並び、往時が懐しく思い出される。

同窓会係の田中・井上両先生と自動車で市内の探訪に出かける。私の出身が旧高坂村なので、通学路と重なる全校長距離競争のコースを辿ることにする。

繁華な商店街を抜け、東上線の踏切を渡り、なんじゃもんじゃの老木を見て、箭弓神社に参詣する。開校以来尊崇厚く、全校生徒校旗を先頭に参拝したこと、初午の賑わい、牡丹の花見などを思い出す。天保年間に建築されたという社殿や絵馬、精緻な彫刻は昔のままで懐しい。森厳な箭弓の杜は、今は箭弓記念館を始め大きな建物が立ち並び、拝殿の前の半ば枯れた杉の古木、整備された牡丹園に時の流れを感じる。

女子高前を通り、坂道を下った所で左折する。右は野本耕地、当時の砂利道は今は舗装になり、一寸戸惑う。東上線のガードに着いて、やっと記憶が蘇る。

松山・高坂間の新道を横切り、昔通った旧道に出る。右手に下級生の頃、上級生から訓辞を頂いた野本小学校がある。左折して上り坂にかかる。ここはボストンマラソンの心臓破りの丘を思わせる難所で、歯を食いしばって頑張ったことを思い出す。

ここまで来ればと蘇生の思いがした箭弓神社の一の鳥居に着く。折柄、その赤い鳥居の上にかかる淡い上弦の月が印象的であった。

松高の伝統行事比企一周駅伝は近く二十周年を迎えるとのこと、その永続を念じながら探訪を終え、橋上駅になった東松山駅に向った。

松高三代

旧六回　須沢新一

先日、突然標題の原稿執筆の依頼があり、改めて周囲を見廻して全く心当りがない位三代就学が少いのに驚きました。中等教育の地域中心校としては些か寂しい感じがします。親子断絶が叫ばれる今日この頃、紙上を飾る同窓名士の業績、母校のスポーツ、進学の栄光に親・子・孫三代が共通の思い出話に興じる醍醐味は又格別です。

私は松山中学を卒業して丁度五十年になりました。たまさか傍を通り過ぎ垣根越しに見る母校の姿形は変っていても、昔の面影はまだ〳〵多く懐しく思えてなりません。思えば昭和八年母校を終えて盛岡高等農林学校に遊学、雄飛して朝鮮総督府の官吏として畜産振興に身を捧げた終戦までの八年間は我が青春に悔いない時期でありました。

この間只残念に思うことは松中の同窓に一人も知遇を得られなかったことです。

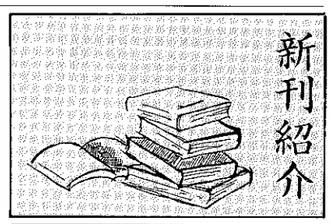
戦後、辛苦の抑留生活から帰郷し、昭和二十一年六月埼玉県職員となり三十年間勤務し畜産課長を最后に退職し、現在は先祖伝来の農業に勤しんでいます。

二代目卓二郎（松高八回卒）は旧姓山越と云います。国学院大学を卒業後中学教師となり、縁あって当家の養子に参りました。仄聞するに松高の揺れ動いた時代に学んだ為か当時のことなど余り多くは語りません。

三代目敏行（松高在学三年）は大学進学を控えて苦闘しています。浪人覚悟で高望み挑戦を目論んでいるようです。只成功を祈るだけです。

（59・1・10記）

新刊紹介



小林秀吉（旧5）著　海と洋

初めての職場が砂町の小学校でなくて、東京中心部の古くからの有名校であったなら、著作のような転変が、果して起ったかどうかと先づ私は考えて見た。初任校での現場の状況が、彼の理想の教育とは裏腹に、どろ〳〵した現実の醜さに驚かされ、落胆しそして反発した事から始まったとしか思えない。それとは別に本間家との縁組で、家族関係の柵に身動きの出来ない窮地からの脱出を計ったものの、教育に対する信念と誓いが、無謀としか思えない「片道切符」で、終戦後第一号のアメリカ渡航を敢行し、辛酸苦汁の生活に耐え、アメリカは勿論欧洲各国に多くの知己友人の支援を得て、現在も尚変らぬ情熱をもって、民間教育者として若者達の育成に、活躍している事敬服の外はない。文中淡々と語っている多くの苦労話は、如何にも小説的で、誰にでも真似の出来る事ではないにも拘らず、面白おかしく表現している点が嬉しく、彼の真骨頂と私は読みとった。題名の海は日本海（本間家とのつながり）、洋は太平洋と大西洋（アメリカとヨーロッパとの接触）を意味すると私なりに解釈した。

多くの学友に読んで欲しい著書であるが、自費出版の限定非売品で、書店頭で入手出来ないのが残念である。（旧一　新井槙治記）

森武次（旧3）著　ゆかりの色の

士官学校出のぱり〳〵の職業軍人の彼が、終戦近く心ならずもの療養生活の中で、武人としての誇りから、脱け出し、民間人としての行末を考えたり、苦脳反問の折り、文学派の彼が偶々今井邦子女史との出遇いから、同好の士を集めてそのリーダーとなり、短歌会を組織して三十一文字の中にあれこれの感懐をこめた五千数百首の中の自選、八二〇首の抜粋と云う此の貴重な歌集の中の、それぞれの心に残る思い出に哀れと共感をそゝられる。

国士舘大学に奉職して、彼らしい安住の場所を得て、中学時代の彼に戻る事が出来、松蔭先生の訓えの心をこめた方針で、厳しくも恩情を持って、現代の青年達の指導教育に傾注するそのエネルギッシュな行動力に私は敬服のほかはない。

短歌同好の方々は、此の歌集から彼の過ぎし方を通して、何か学ぶ点があるのではと思う。

叢文社　発行
定価　三〇〇〇円

（旧一　新井槙治記）

俳句

旧六　国分茶雲

枕木の橋を渡りて草摘みぬ
膝の粉かかえて立ちぬ草の餅

旧六　田嶋耿星

樟落葉ここに奉安殿ありき
狐面かむり面売る一の午

旧七　秡川一男

文弥節泣きつ語りぬ梅雨の雷
夏草や金色堂下の閼伽の井戸

旧八　紫藤むらさき

哇焼く火風ひろいつゝ走りけり
こまやかに　光まとへり　猫柳

旧十一　中山みのる

芽三寸　あゆむ鴉と　麦を踏む
沖晴れて　次の輪高し春の鳶

旧十四　竹ノ谷ただし

秩父嶺の　紺極まりし　冬田かな
雲の綺羅　日の綺羅戦ぐ枯芒

（諸兄の力作を編集委員又は事務局宛葉書でお送り下さい）

遠い菊

竹谷正（旧14）著

竹ノ谷さんと私は旧制松中（現松高）の同級生で、文学仲間として日本ペンクラブ・埼玉詩話会の共に会員である。その竹ノ谷さんが詩集を出版された。竹ノ谷さんは俳誌「七曜」による句歴は長いのに、句集より先に詩集を出された。姉事したと言う車椅子の詩人金子恵美子さんとの出逢いがそうさせたのだろうか。詩二十二篇は安定した温雅な詩風で、竹ノ谷さんの性格がよくあらわれている。中で金子さんを歌った「足」などに情感が色濃くにじんでいて、私の好きな詩である。一つ、酒を無上の友とする竹ノ谷さんの詩がほしかった。私が常に、社會の良識や通俗性に反抗する文学に憧憬しているからだろうか。ともあれ、竹ノ谷さんの詩集出版にお祝の言葉を寄せ、素晴しい句集誕生を期待している者である。

発行所＝樒樺社
定価＝千五百円

（旧十四　榎本了記）

加藤和男（旧16）著　憶い出の大和こころと教育

著者はあとがきで、「毎年私は大和の地を歩く。朝早くから夜おそくまで歩き続ける。歩くというのは実路の跋渉は、古代人の心を尋ねながら実に多くのものを見、考えてゆく。それらは軽薄な近代文明に毒され荒廃した現代人に対する文明批評となり、生きることとは何か、が情熱を以て語られている。

B6三一六頁

（旧二十　井上穀記）

モンゴルあれこれ

高十二回　蓮見治雄

「モンゴルあれこれ」という題で何か書くように、とのお話がありましたので、以下何号かに分けて簡単にお話致したいと思います。

「モンゴル」と言う名称は、四十代より若い世代の者にとっては余り抵抗のない名称ですが、それより先輩にあたる戦前、戦中派の人々にとっては、むしろ蒙古と言った方がピンとくると思います。現代の世界では、それぞれの国家や民族が自分達をどう称しているかを尊重して（つまり、それぞれの自称を）正式な名称とするのが当然であるとされるので、ここでは蒙古といわず「モンゴル」と言いたいと思います。

さて、戦前戦中、蒙古と言えば、内蒙古、外蒙古と分けられていました。私がこれからお話しようとするのは、後者、即ち外蒙古についてであります。

外蒙古は、一九二一年に人民革命に勝利し、三年後の一九二四年にソ連に次ぐ世界第二の社会主義国となり、「モンゴル人民共和国」のことば、歴史、文化などについて略述したいと思います。そして特に我々農耕民であった日本人にとって理解が困難な遊牧について話し致します。（続）

（註）蓮見氏には同窓会理事会のとき講話おお願願した。

（58・10）

短歌

旧三　森武次

条約の改正すらに四十年
積み重ねたる明治と思ふ
濡小光るサラブレットの二歳駒
嵐を巻きて来るは楽しも

旧十八　内田堅二

陽を受けし芒の穂群輝きて
風布の谷を妻と遊べり
身ごもれる白き犬連れし中国の
老と会いたり　日暮の坂に

編集後記

花梨（かりん）

◇編集委員は全体からもれなく出ていただいた。アンテナを高くして会員のニュースや原稿を集める所存。

◇今回は創刊号なので、当方より原稿を依頼する形となったが、次号からは会員からの、原稿が楽しみ。

◇会報発送一万部余。各委員手分けして、大わらわ。苦労といえば苦労だが、会員が会報を手にして喜ぶ顔を思ってガンバル。

◇一月二十一日、編集委員の新年会。瀬川同窓会長も吃吃激励!?に酒持参で馳けつける。

比企の嶺の
　輝きてあり初日の出
三月十日の発行を目ざして乾杯。

◇山本洋一先生の「校長時代」をはじめ、いくつかの玉稿、紙面の都合で割愛させていただく。おわびかたゝ、次号に考慮したい。

◇会報第一面をかざる写真、旧十六回の国分喜彦氏を煩わした。この写真、会員各位には懐しい風景の一つとして見ていただけると思ふ。なお、田島正英氏（旧六・俳号耿星）に、賛句を副えていただいた。

◇カットは松高教諭宮崎稔氏にお願いした。

◇編集、特に最後の割り付けは、東松山市松葉町の古沢繁男氏に協力をお願いした。息子さん二人が松高卒業生ということもあって喜んで協力頂く。

◇「会費がとりもつ同窓の輪」軍資金が途絶えては何も出来ません。会費をよろしく。

◇今年は例年になく雪多く厳冬。

しかし、この会報が皆さんの手もとにつくころは、桜咲く好季節となろう。同窓の皆さんの御健勝を祈る。（84・2・10記）